

『報徳のおしえ』とともに



問合せ先

教育委員会社会教育係 ☎579・5801

令和3年度 「報徳のおしえ」講演会《中桐万里子氏講演》

講演テーマ「報徳」からはじまる豊かな未来創造《最終話》

【恩返しとかお礼をするということは、ちよつとしたものを自分なりに加えるということ】続き

自分に与えられた仕事でも、暮らしていることでも、人間関係ということでも、家ということでも、町ということでも、私たちは色々なものを受け取っています。そこに私たちは、ちよつとしたプラスワンをどんなふうにできるのか。そうやって考えてみるのが「報徳」あるいは「恩返し」ということ。

一人ずつがちよつとしたプラスワンをしていく。その恩返しをしていくことによつて未来が創られていく。未来がもう一歩良いものになっていく。もう少し色合いが鮮やかにになっていく。そんなことが起こると考えたのがこの報徳の考え方でした。

恩返しをするということは、もう少し言えば「恩くり」と呼ぶのがふさわしいのではないかと。そういうふうにならなければ、「恩・おくり」と呼ばれたりしますが、古来日本人はこれを「おんくり」と呼んでいたといわれます。過去に先人たちが受けてきたものは、未来に返していく。親や先祖たちから受けてきたものは、子どもたちや孫たちに返していく。そんなふうには

スワンは次々と返していく。未来へと返していく。そうやって創り上げてきたのが日本の町。あるいは日本の村であり日本の歴史ということになります。先輩たちの思いをどうやって次の世代へ、次に来る者たちへ継承していくのか。そう考えてみるのが大切だと思つていきます。

私たちの時代は、もはやこのことを抜きにしては考えられませんが。コロナ禍で大変なこともありました。しかし、コロナが私たちを変えたことはあり得ないのではないのでしょうか。コロナという外的要因が起こることによつて、私たちはあらためて、自分と向き合い直す、ということを考えているのではないのでしょうか。

立ち止まって、私たちは考えたのではないのでしょうか。自分にとつて本当に大切なこと何だろうか。本当に会いたい人何と誰だろうか。本当にやりたいこと何だろうか。一つ一つの行動に制限がかかるからこそ、日頃考えたこともなかった色々なことを考えはじめたのではないのでしょうか。そして当たり前だと思つてきた者たちの尊さを、あらためて感じたりもしたのではないのでしょうか。

その中で、私はいつたい何者なのか。私はいつたい何を創っているのか。何で仕事をしているのか。働いていつたいどういうことなのだろうか。自分にとって幸せっていつたい何なのだろうか。そんなことを立ち止まって考えてみる機会になったのではという気がします。あらためて「根っこ」に戻る機会になったのではないかと思っています。

「工場の真ん中に、小さな円を描いてそこに立つて」と言われるそうです。これは何故かというところ、じつと見えないことがあるからだと。つまり、しっかりとその円の中に立つて現場を見通して、一体何が問題なのか。どこに不具合があるのか。一番最初に連絡をしなければならぬのは誰なのか。どうやって処理をするか。「立ち止まってしっかりと考えて、見えてから動きなさい」というのがその工場のやり方なのだ。つまり、いきなりバタバタ

動く、効率も悪いし問題解決には繋がらないのだ。まずは円を描いてそこに立つこと。そして、しっかりと現実を見つめること。そこからきちんとした効果的な行動が生まれてくるのだ。

私は、コロナ禍でそのことを何度も思いました。私たちはいまステイホームと言われていますが、「円を描いて立つてろ」状態なのです。「自分の枠から出ていくな」と言われています。不都合なことも、たくさんあります。でも、体を止めてこの円から出られないから、見えてきたものも気づいたこともたくさんあるのではないかと。忙しく動いていた時には見えなかった本心に大事な

ものにも結構出会ったのではないかと。必ずその円を越えて、私たちの活動が再開する時が来ます。でもその時の活動は、これまで何気なくただただ走ってきた毎日とは、圧倒的に変わるのではないかと思っています。それはコロナによつて変わるのではなく、私たち自身の力でそれを変えていくということではないかと。今まで常に動いてきた。そこから解放されて、あらためて私たちの活動が、町づくりに新しく創造的にはじまっていくのではないかと

思っています。この節目の時にこうしてご縁をいただき、ひと時を一緒に過ごさせていただきました。そして、これからはじまりにして更に皆さまとご縁を繋ぎあわせていただきたい。ということをお願いしながらお話をさせていただきました。



講演をはじめにもお話をいたしました。なぜ私たちは毎日頑張つて生きているのか。その答えはパソコン上には書かれていません。私たち自身はいつたいそこにどう応えていくのか。そして、どう語つていけるのか。子どもたちに孫たちに、そしてまだ会えぬこの町の未来の子どもたちに、私たちが何を語り伝えることができるのか。そういうことも、とても大事な課題であると思うのです。

私たちがなぜ仕事をしているのだから。そして、私たちの仕事や毎日の暮らしがつくっていく未来。どの様になることを願っているのだろうか、そのことを改めて考えてみる。それが「報徳のはじまり」ではないかと思つていきます。

繰り返しになりますが、金次郎自身のこの「足」それこそが、大事なメッセージだと祖母は繰り返して言いました。「大きなことではなくていい。そ

れでも、小さくても目の前の自分自身の一歩を、ともかく積み重ねていくこと。そのことこそが未来を切り開くと、金次郎自身は言っています。「私が死んでから、私の名前を残そうとしてはいけません。そうではなくて、今を生きている者たちの実践。それこそを何よりも残してほしい」と「名を残さず、行いを残せ」というのが金次郎の遺言だったといわれています。

「私の名前はもう忘れてくれてもいい。それでも生きていく者たちが、実践し・行いそのことで未来を切り開いていく。そのことを楽しみ、そのことに力強く誇らしく、歩みを切り開いてほしい」というのが、彼からのメッセージでした。

今一度あらためて円を描いて立つているコロナ禍で、私たちの心の目まで開いて、現実を見つめていく。そして、自分自身ともう一度出会う。そのようにすることから、自らが創造の力を

持つ主人公である。主役である。町づくりの大事な担い手である。そのことであらためて自覚を持ち、幸せの増産や生産。あるいはプラスワン。豊かな未来創造。そんなものに歩み出していける。幸せになるために、幸せだから頑張る。そんなふうには頑張りたら、本当にワクワクするのではないかと思つたりします。

こうしてご縁をいただき、二宮の地区でいえば125年前、先祖たちがこの地を開拓し、この地に生きようと。まだ見ぬ子どもや孫たちのことを何度思ったことかおぼやかせません。そうやって一生懸命働く入しながら、畑を耕し町をつくり出していった。そうして生まれていったこの豊頃の町。その町にいて、次なる世代へより一層彩り豊かにこの町を残していけるか。挑戦をしていければ素敵だと思つています。

この節目の時にこうしてご縁をいただき、ひと時を一緒に過ごさせていただきました。そして、これからはじまりにして更に皆さまとご縁を繋ぎあわせていただきたい。ということをお願いしながらお話をさせていただきました。

二宮尊徳の村々復興の思いや、その基になる考えは、える夢館はるにれ通りにもタペストリーにして一部を紹介しています。える夢館へ来館の折には、ぜひ足を止めてゆつくりご覧ください。

ひろめよう！報徳の町に四つの心

「報徳のおしえ」とともに 報徳のおしえ実践指標

報徳とは、すべての人(物)の良さ、得意なところ、その人(物)のもつた味を「徳」といいます。その徳を生かして社会に役立つことを「報徳」といいます。

報徳の道は至誠と実行 報徳のおしえを忘れず実行して、心豊かに生活しましょう。

子ども啓蒙

- 至誠 あかへん 真心をもつて 真心をもち 明るい人になります
- 勤労 いきいき 小さな積み上げを 進んでいき 努力する人になります
- 分度 それぞれの良さ 自己実現に向けて 守る人になります
- 推薦 ゆずる心で 共に生きる 助け合う人になります

「報徳のおしえ」を 家庭・学校・地域で生かし、人づくり・町づくりに取り組みましょう。